

二次元ぷち文庫

サキュバス アサシン

SUCCUBUS ASSASSIN

Kyphosus

表紙イラスト：秋月からす

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『サキュバスアサシン 前編』
『サキュバスアサシン 後編』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



サキュバス
アサシン

SUCCUBUS ASSASSIN

Kyphosus

表紙 / 秋月からす

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

くちば

朽葉・メーアリムケー

伝統ある桜蘭女学院に転入してきた少女。美しい顔立ちとおっとり優雅な物腰で学院の人気者。その正体は人間界に召喚されたサキュバスの姫君で、召喚者の指示を受けて標的を腹上死させるのが任務。

あかいでまい

朱手真衣

退魔士一族の少女。喜怒哀楽がはっきりしている熱血タイプ。クラスメートのメーアが人間ではないと脱んでいるが、正体まではつかめていない。

うるしのくろえ

漆野黒江

メーアと真衣のクラス担任の美人教師。クールな雰囲気です生徒達に人気がある。メーアを呼び出した召喚士であり、彼女とともに法で裁けぬ悪党を排除している。

「あ、ああっ嫌っ……やめてください、何をなさいますのっ?!」

シティホテルの豪華なスイートルームに、少女の悲鳴が響き渡った。よくクツションの効いた、キングサイズのベッドに押し倒されて、彼女は学園の制服と思しきブレザー姿の肢体を恐怖に震わせる。

少女の体臭なのか、花のような甘い香りが室内に立ちこめた。

「くくく、今更何をカマトトぶっている……お前も金のために来ているくせに。お前の両親が、お前……ん、お前……名前は？」

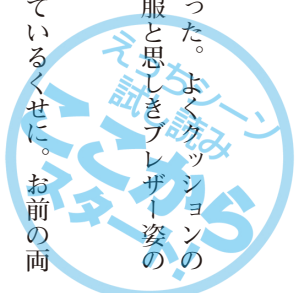
彼女の上へのしかかっているのは、でっぷりと腹の出たガウン姿の中年男だ。男は太くごつごつした指で女生徒の滑らかな頬を掴んで、尋ねる。

「メ、メーア……メーアリムケーですわ……ああ、どうか乱暴はなさらないで」

震えながらも、どこかおっとりとした優雅な声で名乗る少女。艶やかで僅かにウエーブのかかった長い金髪は美しく、整った目鼻立ちや垂れながらもくつきりした眉、濡れた瞳の深い藍色は確かに日本人離れしていた。

「ほう、ハーフか。完全な外人だと思っただが……ふふ、こいつはいい。あの程度の融資話で桜蘭女学院の娘を、それもハーフのお嬢様を犯れるとはな。く、くくっ」

中年男はてかてかと脂が光る顔を醜く歪ませて笑った。たるんだ目元は酔ったかのように赤く染まり、半開きの唇からは泡立つ涎が零れている。これから名門の女生徒を味わう



という状況に、激しく興奮しているようだ。

やにわにもう片方の手をメーアリムケーと名乗る娘の胸に伸ばし、上品な濃紺のブラザーの中に突っ込んで、ブラウスごしに乳房をわしづかみにする。

「あついつ、痛い……ですつ、お願いですから……そんな、ああ……」

いきなりの破廉恥な所行に身悶えるメーア。一方、陵辱者は手に余る大きさの乳房の、絶妙な感触に感嘆した。

「ほ、ほおおおつ……何と柔らかい……服の上からでも、こうも柔らかくて、大きくて……女なぞ数えきれぬほど犯ったが、こんなのは……凄い、凄いぞ、こいつは……おお、うおお、もう我慢できん……おおおおおつ……」

興奮がさらに高まったのか、男は濁った目を大きく見開き、ぎらぎらと輝かせる。そして欲情した獣のごとき咆哮を上げると、両手で彼女の着衣の襟元を掴み。

バリッ、バリバリッ……!!

「ひっ、嫌あああああつ……!!」

異常な馬鹿力を発揮して、ブラジャーごとブラウスを引き千切ってしまった。ボタンが弾けとんでブレザーの前が開き、透明感溢れる白く大きな塊がぷるんとたわみながら飛び出してくる。それは美しく、見事な乳房だった。

自重でやや潰れながらも、その輪郭は艶やかな曲線を維持しており、つんと突き立った

寶石のごとき乳首は薄いピンク色。そして、滑らかできめの細かい肌から強く立ちのぼるのは、人を惑わす妖花のような甘く切ない香り。

「おおおっ、これだ、これだあっ……ふおおおんんっ……！」

震える少女の胸に、男は亡者のような浅ましきでむしゃぶりついた。

ぶちゆるるるるっ……ぢゆるっ、ぢゆる、ぢゅうううううっ……。

がさついた唇で吸いつき、乳首を舌先で転がすと、体臭なのか、男の口の中に甘い香りがいっぱい広がる。空いた手でもう片方の乳房を力任せに揉みしだくと、滑らかでいて吸いつくような弾力性ある手触りが、喜悦となつて伝わってくる。

「あっ、そんなっ嫌っ、ああ、お願いですから、ああ、はああ……！」

身体をよじり、震わせながら乙女は叫ぶ。陶磁器のような頬を羞恥の朱色に染め、ぎゅっと睨った睫毛の合間からは光る雫。だが、彼女の唇は僅かにつり上がって、眉根はうつとりと下がる。これから楽しい食事だ、とでも言うように。

もし陵辱者に、彼女の様子を観察するだけの冷静さが残っていれば、その表情は決して恐怖や苦悶、羞恥などではないと分かつたろう。しかし餓鬼のごとく乳房に食らいつく中年男には、そうした余裕は既に消え失せていた。彼は衝動のままに、残った着衣をはぎ取るべく指を少女の下半身に伸ばす。

「乱暴は、乱暴は止めてくださいっ……あっ、そんなっ恥ずかしいっ、止めて、止めてく

ださいっつ……ひつ、あああつつ……」

ビリバリビリッッ。

残されたスカートとショーツを引き千切られたメーアは、もはや男の獣性を掻き立てるための演技としか見えない悲鳴を上げて、身体を妖しくくねらせた。

純白の下腹部が暴き出されると、彼女から立ちのぼる甘く狂おしい芳香は一層強烈なものとなった。男はその香りに心奪われたかのように、乱暴に真つ白な太腿の合わせ目にごつい指を突っ込み、掻き回す。

ぐちゅっ、ぬぷっ、じゅぷっ、じゅるっ……。

「おおおお、おおうつつ……ふははっ、ははっ、上品ぶった顔をしているくせに、何だこの淫乱オマ○コは……もうこんなどろどろにしやがって……桜蘭のお嬢様が、トンだ雌犬だな。お、おお？　こ、これは凄い！　入り口からして、指をぐいぐい吸い込みやがる……！！　ここまでスケベなオマ○コは俺も初めてだな！！」

乱暴に媚肉をまさぐる男の目は獣のようにギラついていた。真つ赤に染まった顔からはどんどん脂汗が垂れ、息は犬のように速い。ガウンの裾が乱れ、血管浮かぶ太い黒棒が飛び出していった。

「はあっ、はあっ、はあっ……はは、ははっ、何だこの、いやらしい匂い……この匂い……匂い……おお……おお……ふおおおお……！！」

後半は言葉にならない雄叫びだった。少女の上へのしかかっている発情した獣は、膨れ上がった性交衝動に思考や意思を圧倒されていた。その様子に、メーアリムケーは妖艶な微笑みを浮かべ。

「ふふ……うふふ、おじさま……メーアはもう我慢できませんの。お願いですわ……おじさまの、大きくて逞しい生命の樹……どうかメーアのいやらしいお口に、食べさせてくださいな……」

白い滑らかな両脚を、巣にかかった獲物に近づく蜘蛛のようなゆつくりした動きで広げた。僅かな産毛に飾られた、乳首と同じく薄桃色の妖花が開く。

「ふお、おとおおつ、いいとも、やるぞつくてやるぞつ、おとおおつつ!!」

魅入られた男はガウンを脱ぎ捨てると、醜く太りたるんだ大きな肉体で、上半身にだけ制服の残骸を纏った彼女の上に倒れ込んだ。

ぬぶるつつ……。

「つおひよおとおおつつ……!!」

突然落雷のごとき快樂に打たれ、中年男は白目を剥いて魂消る悲鳴を上げる。倒れ込んでくる身体の動きに合わせ、少女が熟練娼婦もかくやという的確さで迎え腰を使い、彼の雄器官をその肉腔に一挙動で飲み込んだのだ。

ぐちゆるるる……ぎゅちゅつ、ぎゅちゆるるるつ、ぢゅううううつ……。

ぬかるんだ最深部では、はまり込んだ亀頭に蠢く無数の鬚が吸いつき、密集した顆粒状突起が擦り舐め、痺れるほどの高圧電流にも似た快楽を流し込んでくる。

柔軟で弾力に富んだ幾重もの括約筋が節くれ立った肉幹を締め上げ、海綿体ごしに尿道をしごき立てる。熱く潤んだ蜜粘膜からは歡喜そのものが皮膚ごしに神経へと染み込み、肉の魔境は恐ろしいほどの負圧で彼の全てを吸い込もうとする。

「おおおおおおおっつ、こ、これは何だ……こんなのは、おお……凄いで、まだ入れただけなのに、凄すぎてどうにかなくなってしまいそうだ……おお……おお……!!」

獲物から快楽と引き換えに何かを絞り取るとでも言わんばかりに、妖花の内部は強く弱く複雑に奇妙に蠢く。名門学院に通うという少女、メーアリムケーの雌器官は、この世ならざる魔性の畏であった。歴戦の男は、あまりの快楽に身動きもとれない。

「はあっ、はああああんっ……素敵ですわ、おじさま……おじさまの肉……生命の樹……メーアの中でこんなに膨らんで、こんなに脈打って、こんなに……」

媚声とともに彼女がその脚を絡めると、それに促されるかのように、男の腰がようやく動き始めた。

ぐぶっ、ぐばっ、ぐんっ、ぱんっ、ぐばっ……

「あごっ、おごおっ、凄いで、凄いで、ごひっ、おお、おおおっつ止まらぬっ」

ピッチがどんどん加速していく。汗と粘液を飛び散らせて、男は犬のように舌を突き出

して喘ぎ、顔を真つ赤にしながらも狂ったかのように腰を動かした。

「はんっ、あはっ、ああっおじさまっ、そう、そうですわっ、おおっもっど、もっど突いてっつ、おじさまっ、メーアをついっばいに、いっばいにしてくださいなっ……」

少女の叫びはもはや嬌声ではない。それは男を破滅へと誘う歌声だった。

そして男の尻がびくびくと引き攣った。背中を仰け反らせ、叫ぶ。

「ぎひあおおおおっおっ……おおっ、おおっ吸われるっ、吸い出されるっつあごおおおっつ……こんなっ、こんなあああああつっつ……!!」

ぶびゅっ、びゅぐるっ、びゆるびゆるびゆるるるるっつ……!!

獲物を逃がさず銜え込んだ肉唇の合わせ目から、雌の粘液と白濁が噴き零れた。数知れぬほど女をいたぶり泣かせてきた剛直が、ものの数十秒で絶頂させられたのだ。

びゆるるるっ、びゆる、びゅぐびゆるぶるびゆるっ……!!

尋常でない量の精液が次から次へと零れ、シートに大きな染みを作っていた。

「はあああ……ああ、こんなにどくどく噴き出して、脈打って、震えて……素敵、素敵ですわ、おじさま……だからもっど、もっどメーアに食べさせてくださいな……おじさまの生命の樹」

熱病に冒されたかのように痙攣する男の下で、少女が囁く。白くしなやかな手足を絡みつかせ、整った顔には淫らな恍惚を浮かべている。

「がああああああ……あああ……あ……おお……はっ、はあっ、はっ……」

たつぷり一分は続いた絶頂をようやく終えると、男はがくりと脱力して身体を少女に預けた。手足は脱力して小刻みに震え、呼吸が異様に速い。心臓の脈拍は明らかに危険な速度だ。肥えていた筈の彼の顔は、たった一度の射精で土気色にげっそりとやつれ、死相を浮かべていた。

「え……お、お前は一体……な、何だ……何者なんだ……っ?!」

一方メーアリムケーの姿もがらりと変化していた。美しい金髪はざわざわと蠢きながら艶やかな闇色に染まり、どこか気弱そうだった目鼻立ちも、和やかながらも強さを秘めた、つり上がった眉と目へと変化している。彼女は、生命力の大半を失った男を底知れぬ闇色の瞳で見つめ、優しく微笑んだ。

「んふうう……はあっ、素敵でしたわ、おじさま……でも、まだ……まだですわよね。まだ残っていますわよね……さあ、メーアがもつと、もつと、気持ちよくして差し上げますから……どうか最後まで食べさせてくださいな。おじさまの……生命」

その言葉と同時に、男の腰が震え、再びがくがくと動き始める。

「はっ、はああ……ひっ……まで、待ってくれっ、ああ、ああああっ、もうっ身体がつ、心臓がああああ……もうやっやめっっ助けてっぎひひひひひ……」

「!!」

生命の危機を感じて拒絶しようとするものの、彼の身体は既に自分のものではなかった。魔少女のなすがままに仰向けにされ、跨がられてしまう。

「ふふふつ。大丈夫ですから、メーアに任せてくださいな、おじさま……ちゃんと、いいところにお連れして差し上げますから……苦しみも悩みもない、真っ暗で、この上なく安らげる場所に……」

十

メーアリムケーの真っ白な裸体が仰け反り、戦慄く。夜闇の色の長い髪が、かすかな藍色を煌めかせながら、波間の海草のように乱れそよぐ。手に余るほど大きくも美しい曲線を保った乳房が揺れ、たわむ。しなやかな腰が、犠牲者から最後の一滴を啜り取ろうとしてゆっくりと上下動する。

「はああ、ああ……おじさま……おじさまが……ああ、消える、消えてしまますわ……ああ……おお……消える、消えていく……私の中に……ああ……」

彼女が跨がっている灰色の醜い塊はもはやぴくりとも動かない。かつては尽くせぬ欲望を浮かべていた瞳もどろりと濁って散大し、嘘と罵倒と脅迫を吐き出し続けていた口もだらしなく開いたままだ。呼吸も心臓も既に停止している。

そして、男の全てを吸い終えた妖少女は、冷たくなり始めた軀から降りた。

ぬぶん……。

「うお、おお、こんなに濡らしやがって……とんだ淫乱バンシーだな。それにしてもすげえ名器じゃねえのか、これ。締めつけも、吸いつきも、ハンパねえぞ」

術を封じられたバンシーが下劣な男達に弄ばれる様子を、烈鬼会のボスと瘦せたウド、スキンヘッドのエゴマがにやにやと眺めている。

「ふふふ、どうした……人間風情に陵辱されるのは嫌か？ 嫌なら言うんだ。お前を送り込んだ召喚士の名前は？ 他に呼び出されている魔物は？」

死を運ぶ邪悪な妖精バンシーは性とは無縁の、ある意味清らかな乙女のような魔物である。もしこの娘がバンシーであるなら、人間の男に穢されることはこの上ない屈辱の筈だ。悪党達はそう思い込み、尋問の手段として彼女を辱めているのだ。

「くうっ……だ、誰が言うものですか！ お前達のような下劣な人間に……ひっ、ひぐっ、や、止めなさいっ、こんな狼藉っ……おのれ、覚えてい……あうっ」

顔を恥辱に歪め、肩を震わせながらも意地を張る魔少女。

「強情なヤツだな。状況が分かってないのか？ ……よし、エゴマ、コイツが吐く気になるまで、お前のをぶち込んでやれ」

ボスの言葉に、スキンヘッドの男がにやりと笑って立ち上がり、やにわにズボンの前を開け始めた。先ほどの二人よりも一回り以上大きい凶悪なサイズの肉杭が、これまた不潔な悪臭とともに飛び出す。

「オーケイ、ボス。くくくつ、たつぷり啼かせてやるぜ、バンシーのお嬢ちゃん」

そしてエゴマは彼女の両足を掴むと力づくで広げさせ、その間に膝をついた。

「ああつ止めなさいっ、このっ、この術封じの札さえなければ、こんなヤツら……！！ あ、

あとおっ……生命の樹がつ、やめてっ、あああつっやっやめてええっ……」

手足をくねらせ、銀髪を振り乱して抵抗を試みるが、三人の男の力には敵いようがなかった。熱を帯びた肉の凶器が秘華に押し当てられて。

ずじゅううううう……っつ。

「おおっおおおおっ、こりや……こりやすげえ。ヒダヒダが吸いついて、ツブツブが擦れて、おお……ぐつと締めつけてきやがるぞ……こんな具合のいい穴は初めてだ……ぐふふつ……おいお前、俺が出すまで耐えろよ？ 吐くんじやないぞ？」

スキンヘッドの男エゴマは、包み込む淫肉の絶妙な刺激に歓びの雄叫びを上げた。すぐには腰を動かさず、長大なペニスを、雌器官の一番奥まで深々と埋もれたまま上下左右に軽く揺さぶって、妖姫の妙なる味わいを楽しんでいる。

「ぬ、抜いてっ、抜きなさいっ今すぐ……あひっ、んああああ……！！」

下賤な人間に聖域を侵害された告死妖精は、恥辱の涙を浮かべながらも押し寄せる快楽に身体を震わせ始めていた。

その様子を興味深げに眺めていた頭目だったが、すぐに欲望が臨界を超えたらしく、二

ヤリと唇を歪めて彼らの前に出てきた。瞳に邪悪な欲望の影が過っている。

「チッ、本末転倒してるんじゃないよ、エゴマ。どれだけいいのかわらんが、さっさと吐かせろ……そうだ、俺も手伝ってやる。ひっくり返せ」

「あつああつ……何を……あうつ……」

言われるがままにエゴマは繋がったままで少女を持ち上げて横転し、女性上位の体位をとった。真つ白な丸い尻の真ん中に、どす黒い雄肉が深々と銜え込まれている様が、ボスの目の前に差し出される。同時に、脳まで染み込むような甘い香りが辺りを包む。そして突如、裂帛音が響いた。

「ぱあんっ……!!」

「んんっひうっううっ……!!」

彼女は破れ残った制服の背中をびくんと仰け反らせる。ボスに尻を平手で叩かれたのだ。後には真つ赤な手形が残っている。だが、スパンキングは続く。

「ぱあんっ! ぱんっ! ぱあんっ! ぱんっつ!」

「あひっ、ひいっ、止めっ、あああつっ止めてえっ、ひっ、あああつっ……!!」

「おっおおっ、締まるっすげえ締まるっおおっ……叩かれて、こんなにっ……いいぞ、もつと、もつとだっ……」

立て続けの小気味良い音とともに、真つ白な両の尻に次々に赤い紅葉のような手形が増

えていき、銀髪の邪妖精はペニスを銜え込んだまま恥辱に震える。

「ああっ、あうっ……はあっ、はあっ、ううっ……ひっ?!」

そして尻叩きは終わった。しかし、息をつく間もなく彼女は肛門に熱く硬い感触を感じる。頭目が下から貫かれる魔少女の腰に跨がり、エゴマに勝るとも劣らない太い凶悪器官を押し当ててきたのだ。

「よし、俺はこつちだ。おら、尻上げな」

メリ……メリメリッ……ぐぶぶぶつつつ。

「い、嫌あつ、そ、そつちは嫌つ、お願い、お願いですからっ……ひぐつ、ぎひあああああつ……嫌つ入って、入ってきたあつ……あああああつ……!!」

同時に二本も肉杭を打ち込まれ、さしもの魔姫も大きく背を仰け反らせて悲鳴を上げた。全身から玉のように汗の雫が噴き出し、噴き零れ、魂を奪われそうな甘く妖しい芳香が一層強まる。

「やめてっ、やめてそんなところっつあああああつ……!! 嫌つ恥ずかしいっつ……おとおつ、くるっ、入ってくるっつ、お腹っ広がっちゃうっつ」

前後をぐりぐりとこね回されて、身悶える銀髪の妖精を貫いている男達の顔は、今やすっかり獣の形相だった。歯を剥き出し、緩んだ目元にぎらぎらと浅ましい欲望を浮かばせる。「ほほっ、こつちもいい塩梅だぞ、ケツのくせに。柔らかくて、ぐねぐね絡みついてきて、

それでいて根元はキツく締めつけてきやがる……おお……くはっ、こりや確かにすげえな……ようし、どっちがコイツに吐かせるか勝負といくか、エゴマ」

「ぐへへっ、負けねえぜ、アニキ……おおおっつ、さらに締めつけてきやがった……勝手に蠢いて、どんどん擦りつけてきやがる……はっ……何て穴だ」

パシンッ！

ぐちゅっ、ぐぼっ……ぐぱっ、ぱんっ……。

ボスは白尻を一つ大きく叩くと、ぐいぐいとアナルを犯し始めた。その下でもエゴマが筋肉質な身体で突き上げ始める。

少女の括約筋は限界まで引き延ばされて、その中を焼けた鉄のような剛直が強引に出入りする。肉唇も黒ずんだ怒張を打ち込まれて、強烈な甘い香りとともに蜜液を噴き零す。

「ひぎあああああっつ、擦れるっ、擦れてるっ、ごりごりっっお腹の中でえっつ……いっ、あうううっつ、お尻とっあそこがあっつごりごりっ薄皮ごしにつっ……駄目っんあああああっつ、そんな駄目っ、おかしくなるっ……んぶぶぶっつ!!」

魔姫の悲鳴は途中で途切れた。我慢できなくなった痩せ男、ウドが、三人の前に回り込んで彼女の口に雄茎を押し込んだのだ。

「はっ、はあっ……ボス、エゴマ……俺がのけ者つてのはナシでしょ？　へへっ」

「ふほっ、ほっ……おいウド、それじゃ秘密を吐けねーだろうが。ちっしょうがねーな……

…あ、おい……誰が混ざっていいって言った、メダラ、ハゼ」

ボスは快速で少女のアナルを陵辱しつつ、二人の下っ端を見とがめた。いつの間にか、肥満体のメダラは彼女の手を取って己の逸物をしごかせており、小男のハゼは彼女の髪をペニスに巻きつけて汚しつつ、片手を伸ばして乳房を揉んでいた。

「んんっ、んおおおっつ、だ、だつてこの女、俺らが攫つてきたんですぜ」

「はひっははっ、はっ……こんな状態で我慢とか無理っすよ、アニキ、げひっ」

二人とも目を血走らせ、口の端から涎を垂れ流している。今や銀髪の告死妖精は、異常に興奮した五人の男達に寄つてたかつて陵辱されていた。

彼女のアナルはぎりぎりまで押し広げられ、本来受け入れる筈のない男性器を、汗と粘液の潤滑によりスムーズに飲み込み続ける。

ヴァギナは結合部から泡立つ愛液を噴き零し、押し込まれるペニスにはむしろ歓迎するかの様に花卉がまとわりついている。銀髪は不自然に揺れて男達の身体に絡みつく。

彼女は口に押し込まれた肉茎を懸命に舐めしゃぶりながら、途切れ途切れに嬌声を上げた。

「んむむっ、ぢゅっ、ぢゅううっ……んひっ、はっあっつ、凄いつ凄いのおっ、お腹の中、掻き回されてっつ二本もっ……むぶぶっつ、んちゅううっ……!!」

ボスとエゴマは、今や狂った杭打ち機のごとき激しいピストン運動で、妖姫の排泄器官

と生殖器官を犯している。

ぱんっぱんっぱんっぱんっぱんっぱんっ……。

じゅぐつ、ぐんつぐぶつ、じゅぶつ……。

凶漢は目の前の白尻にしがみつき、必死で腰を振りながら、部下の勝手な行動を怒鳴りつけた。烈鬼会では彼の命令は絶対だ。

「くおつ……いいからその粗末なのを仕舞えつ、メダラ！ ハゼ！ 命令だ！」

「おつおおつ、おいやめろつ、テムエらの汚いの、俺にブっかけたら殺すぞ！」

しかし手コキ髪コキに狂う二人は、欲望から離れることを拒絶した。

「こ、こればかりは……こればかりはアニキの命令だつて聞けねー！」

「ああもう、このおっぱい、この匂いっおおっおおおつ、俺は、俺はああああつ」

「て、てめえらつ……くっ……ふお……おお、おおおおつ……」

何かがおかしい。頭目は欲情で真っ赤に染まった頭の片隅で辛うじて考えた。いくらコイツがいい女で、部下どもが飢えてたとしても、ここまでの興奮は異常だ。常に冷静で冷酷だった筈の自分も、かつてないほど興奮している。

そもそも、何故こんな、全員で女を輪姦するような流れになったのか。この女、性とは無縁のパンシーにしては淫らすぎはしないか。この匂いも、死の妖精のものにしては艶っぽすぎはしないか。

何故今までこれがおかしいと思わなかったのか。

(別の刺客の攻撃か？ いや……部屋に張ってある防御結界には異常は……)
 獣と化しつつある彼は理性を総動員して結界の様子を探り、そして。

「おお、おううつ……な、何だ……ごく弱い、俺の張った覚えのない結界が……何だこれは、まさか……お、おいハゼ！ テメエの持つてるのは何だっ?!」

いつの間にか小男ハゼが手にしていたものを見て、ボスの頭の中は真つ白になった。それは、ウドが先ほどの娘に貼った筈の術封じの札だった。

「やべえっ!……今すぐ離れろっ! おっ、おああああ……っつ……?!」

畏にはめられたことを悟った瞬間、男達は落雷のごとき苛烈で破滅的な快感に全身を打たれて痙攣した。犯していた魔物から離れるどころか手足の動きもままならず、背筋を仰け反らして舌を突き出し、言葉にならない悲鳴を叫ぶ。

「えぎあああああ……!! おごおおおおお……!!」

「ぎひひひひひ……こりや、こりやあああああ……!!」

そして彼らが翳っていた少女もまた姿を変えていた。銀色の長い髪は、僅かに藍色を帯びた藍色に。破れた制服が完全に裂け落ちて、白い背中から漆黒の大きな翼が開き、頭部の両側には湾曲した一對の角が形成される。

その美しくも禍々しい姿に男達は、もう彼女の快樂からは逃れようがないと知って絶望

する。今や犠牲は彼らのほうだった。

「なっ……ああ、ああっ、バンシーじゃねえっつ……どうしてっ……あっあああっつ腰が
つ腰が勝手につつ……はっああっつ、とまれ、とまれええつつつ!!」

…っばんっつばんばんばんっつ……!!

濁った目を皿のように見開いたボスが、先ほどに倍する猛烈なペースへとピストン運動を加速する。彼の犯している排泄器官の筈のそこが、食虫植物のごとく蠢き、吸い込み、締めつけながら、意識を消し飛ばしそうなほどの愉悦を送り込んでくるのだ。限界を超えた負荷に全身の筋肉が悲鳴を上げるが止まらない。

「あくおとおおっ、だ、駄目だっ身体が、身体が言う事を聞かねえっつ……」

ペニスを包み込む淫肉が、動きに合わせて玄妙に締めつけを変化させ、顆粒状突起と襞構造をぐぐぶと押しつけて無次元の悦楽を容赦なく流し込んでくる。

「やめろっやめてくれっっそんなしやぶらえらあうおとおおっっ」

暖かくぬかるんだ口の中で、剛直を魔少女の舌が柔らかく締めつけ、鋭敏な龟头山腹を舐め擦る。同時に、何もかも絞り取りそんな強烈な吸引が、海綿体の内側を快樂で溺れさせる。

「ひっ何だコイツはっ、髪の毛がっ動いてっつあっあぎっあっあっあああっつ…」

「ぎひっげひっ……助け、助けてくれおっおっおっおっ……」

二本の怒張に、妖姫の長く艶やかな黒髪が蛇のごとく襲いかかる。亀頭冠の下の鋭敏なくびれを締めつけ、這いずり、肉幹に絡みついて強くしごき、股間から脳天まで神経を焼き尽くすような快感を生じさせる。

ぐちゅぐちゅつぐぼつぶちゅつぐちゅつつ。

じゅるるるるつっつじゅちゅるるるるるるるるつっつつ。

つきゅつきゅちゅつきゅつきゅるるる……。

さしゅ、さしゅうつ、さしゅるる、るるるるるるるつ……。

男達は憑かれたかのように腰を振り、舌を突き出して絶叫し、痙攣した。

狂宴の中心で、五本もの大きく汚れたペニスを突き立てられ、銜え込み、押しつけられている魔姫が実に楽しげな、大いに充実しているといったような笑みを浮かべる。

「んじゅるるるつっ、くりゅくりゅくりゅりゅりゅつ……ぷはっ、はっ、あはあああああつ、皆さん、そう、そう……あふつ素敵ですわよ……さあもつと、もつと、皆さん
の生命を私に……メーアに食べさせてくださいな……んむちゅううつ……」

男達はもはや理性を完全に喪失し、ただひたすら機械のようにペニスを振り回す状態に陥っていたが、ボスだけは辛うじて思考能力を残していた。それがゆえにより長く、深く
快樂地獄を味わうことになる。

「おはっ、ひはっ、はぐつ……テ、テメエつ、何で、俺の『見鬼』で分からなかったん

だっ……テメエはサキュバスじゃねえかあああああ……!!」

「ぢゅられられらっ……ふはっ、あら貴方、術の効きがっ、はあんっ、あっああっ、んんんっ、貴方程度では知らない……でしようけど、高等技術んんっ霊体擬態っ……私の召喚士が掛けてくれた……あんっあはっはあっあお……」

正体を現した淫魔姫は、全身で男達の魂を貪りながら、深い藍色の瞳を歓喜に濡らし、頬や目を恍惚と歪めて囁く。

「んむんんっ、ふあっ……つああ、どれもこんなに膨らんで、びくびく震えて、そろそろ頃合いですわね、皆さん……んああ……さあ……引き換えに、至福と、安らぎを差し上げますから……現世では決して得られない、真っ暗で、永遠なる静けさ……んはあっ、ああっ……ですからメーアに、くださいな……んんっ、生命……っ……」

最初は彼女の肉唇を下から突き上げているスキンヘッドの男、エゴマだった。筋肉質の全身に血管を浮き上がらせて、上に乗っている仲間ごと彼女を持ち上げて仰け反って果てる。

「おぼおおおおおおっ!! 出るっ、あああっつ出ちまうっつ……!!」
びゅぶっ、ぶびゅぶぶぶぶるるるっつ……!!

男が注ぎ上げるおびただしい白濁粘液が、メーアとの接合部から溢れて床に飛び散った。それから呼吸が停止して全身が土気色に染まり、かっ剥き出した目の瞳孔が散大してい

くが、彼の射精。ピストンは心臓が完全に停止するまで止まらなかつた。

「……ふあああんっ、んはああああ……はああ、メーアのお腹に沢山……熱くて、苦いのが広がって行って……んっ、美味しいですわ、貴方の生命……さあ、他の方も、どんないらしてくださいな……もうお終いでしょう？」

その次は小男ハゼと肥満男のメダラだ。はち切れんばかりに紫色に染まり、血管を浮かび上がらせたペニスを、メーアの漆黒の髪に絡み取られたまま力尽きる。

「ぎゃひいいいいいい……たっ助けっつきひひひひ……」

「出るっ……髪っ動く髪の毛がっおおおっしごいてっつ出る出る出るっっ！」

ぶじゅっつ、びゆるっびゆるるるっつ……！

びびゆりゆりゆりゆりゆっつ……！

屠殺される家畜のごとき悲鳴とともに、魔少女の黒髪に、翼に、背中に、顔に、異臭を放つ熱粘液が次々と降り注いでいく。体内のどこかの器官が壊れたのか、それは正常な人間をはるかに超えた射精量だった。全身に汚濁を浴びたメーアは、男達が真つ白な生命を噴き出しながら死んでいくのを、聖女のごとき恍惚の微笑みを浮かべて見守った。

「はああ……ああ、熱い……お二人の生命……んっ……私の肌から染み込んできますわ……さあ、次は……んんんんっ、んくっ、んちゅううううっつ」

「あぎあああああああつっ!! やっ止めっ死にたくなっつあああああ……」

「あつあああおおおおつっ……これが淫魔の……くっ、ただの口なのにつ、おうっ……こんな凄いなんてっ、んんんっつ……す、少し緩めてっ、でない私っ、どうにかなってしまいたいそうだわっ」

暖かい口中、亀頭冠を舌先でなぞられつつ、強く吸い込まれる快感が魔造ペニスから伝わってきて、真耶は豊かな乳房をたわませながら身悶えた。

「ひゃうっつ!! やっやだっこれっ……メーアっつ……もう、もう私っああああつ……!! つつっ恐いっ、どうなるのっつ……お腹の奥が……熱くなつてっつ……っ……びりびりくるっつ」

淫魔姫の絶妙な指使いに真衣も身体をよじらせる。そして、二人の両性具有者へと交互に奉仕するメーアリムケーも、口内の巨大な肉柱に酔い痴れたかのように瞳を潤ませ、目元を緩めていた。

「ふん、下等な人間相手だというのに、すっかり雌犬の顔になっていないか。魔羅さえあれば何でもよいのか? 卑しい種族め。さあ、そろそろ……」

「言われずとも、私も待ちきれなくなってきたところですよ……ほら見て、マイ……私、もうこんなに濡れてしまいましたのよ……」

メーアは口と手を離すと、嘲る魔王に視線もくれずに床に腰をおろし、真衣に向かって両脚を広げてみせた。透明なほど白い太腿の間で薄いピンク色の妖花が淫らに口を開き、甘く切ない香りを放つ蜜をつつと流す。

「ふふっ、楽しみにして頂いてよろしくてよ? ……自慢ではありませんけれど、口や手よりずっと気持ち良い仕上がりになっていきますから、私の、ふふっ……オマ○コ……。食べられずに楽しめる機会なんて、滅多にありませんわよ」

「うわ……ちょ……み、見せないでよそんな……ごくっ……そんないやらしい……ピンク色で、ぬるぬるになって……あつ、動いてる……ぱくぱくっ……」

目の前の雌肉に己を突き入れたい。奥深くまでねじ込んで、暴れて、犯したい。疑似男根に受けた奉仕快樂のせいか、それとも立ちこめる淫魔の香りのせいなのか、退魔少女はお腹の奥に獣のような衝動を覚えて、戸惑った。

その隣では母親の真耶も欲情と恥辱を堪えていたが、熟練の退魔士である彼女は心の片隅で状況を分析していた。経験から言って、魔物の微笑みにはたいい裏があるのだ。

(……このサクユバスは何のメリットがあつて、私たちを誘惑するの? この魔器で犯されたら、力を根こそぎ吸収されてしまうことくらい、分らない筈はないでしょうに……) 「さ、マイ。リードして差し上げますから、仰向けになって下さいな……」

「え……で、でもっ……そんな、女同士でしょ……こんなこと……」

その一方で真衣は、誘惑や性的衝動と理性、羞恥心の板挟みになって戸惑っていた。退魔士とはいえ、情緒面では同性愛とは無縁の普通の少女なのだ。いや、メーアが転校してきてから、奇妙にどきどきさせられることが多かったから、そのせいで内心では余計に恐

れているのかもしれない。一線を越えて戻れなくなってしまうのではないかと。

（もしかして、他にも刺客がいて……その攻撃を待っているの？　だとしたら、そのタイミングはおそらく門が開く直前、辺りを満たしている波動が乱れて、ゴズナにも侵入者を探知出来なくなる瞬間の筈……ならば……）

その隣、内心で状況を推測した母親は、戸惑う娘の背中をそつと押した。

「仕方がないわ、真衣。ここは……恥ずかしいけれど、言う通りにしましょう。少なくとも今は、私たちに危険はない筈だから」

「そんな、お母様……？　うう、う……分かりました……じゃ……じゃあいい、メーア？」
真衣は母親の声に一瞬驚いたものの、すぐに恥ずかしげに顔を伏せて、切なげなため息を一つつく。それから床に脱ぎ捨てていた巫女装束の上に、言われた通り仰向けに横たわった。装着した勃起魔器がたゆんと揺れて、猛々しく天を衝く。

「マイに私が犯されるなんて……予定していたのとは逆ですけれど、でもこれはこれで楽しみですわね……ああ、偽物の生命の樹なのに、こんなに上を向いて、脈打って……」

その様子にメーアはうつとりと嘯くと、おもむろに跨がってきた。少女退魔士は不安と期待に胸を高鳴らせながら、魔姫が自分の上にのしかかる様を眺める。

白く大きな乳房がたわんで揺れる。視線に気がついた藍色の瞳が微笑む。以前にもあった光景だが、今回は抵抗感や恐怖感よりも、奇妙な期待感が強かった。疑似ペニスの先端

に、熱くぬかるむ感触が伝わってくる。

「ああ……ニセモノなのに、マイの心臓のどきどきが伝わってきて……はあ……さあ、それでは行きますわよ、マイ……んっ……」

メーアはゆつくりと腰を降ろしていく。ほぼ無毛の、剥き出しの秘裂に先端が隠れて。
ぬ……ぬぷ……ぬるるるるっ……。

「あつ、ふあつ、ああ……ふああああああつ……やつああつ、何っ何なのっつ、こんなつ……ああああつっ」

人造とはいえ鋭敏な亀頭山腹が、熱くぬかるんだ肉の輪を押し広げてくぐる。全身の皮膚に痺れるような愉悅が走る。

さらに魔姫の腰が沈み込むと、複雑玄妙な突起や褶曲が擦れ、吸い付いて、身体中の神経に火のような悦楽が流れる。それから、今度は括約筋に武張った肉幹を吸い込みながら締めつけられて、下半身の奥底が淫楽で煮えたぎる。

「あつああああああつ、メーアつ、メーアああああああつ……!!」

メーアリムケーの暖かく、柔らかく、淫らな胎内歓喜に、真衣の理性は打ちのめされた。全身を痙攣させて悲鳴を上げ、跨がる淫魔姫にしがみつく。

「んんんっ……ああつ、マイつ、ああつ、はあつ……入り、ましたわっ……!! 生命の樹がっ、お腹の中で一杯に……っ、奥にまで当たってっ……んおおっ、凄いつつ……!!」

メーアもまた、深々と飲み込んだ怒張の、勝手の違う異物感にがくがくと腰を震わせた。括約筋を押し広げ、肉襞を掻き分けて子宮口にまで到達した疑似ペニスの刺激だけでなく、ゆっくりと、しかし着実に魔力を吸い取られていく、いつもと逆の力の流れが彼女の快感を増幅しているのだ。

「あはあっ……ああつ、吸われてるっ……力、吸われてますわ……こんなの、初めてっ……はっ、はあつ、はあ……っ……では、動きますわよ、マイ……っ」

吸収の異様な快感を乗り越えて、メーアの腰がゆっくりと動き始めた。

ぬぶぶぶぶっ……。

腰が上がり、薄ピンクの肉唇の合間から赤紫色の膨れ上がった怒張がゆっくりと粘液まみれの姿を現してくる。その間、鋭敏な亀頭冠を肉襞や顆粒状突起に密着摩擦されて、ずきずきと下半身に響き渡る肉悦に真衣は悲鳴を上げた。

「ひっつああつ、引っかかってるっつ逆向きっつ……!! あああつっ擦れるのおっつ……駄目っああつ気持ちいいっつこんなっ、私っ女の子なのにつっつ……」

ずぢゅうううううっ……!!

上がり切ってから、反転して再び沈み込み、呑み込んでいく。張り出した巨大な頭部で内臓ごと子宮まで押し込まれるような圧迫快感に、魔少女は仰け反って身悶える。

「んおおおおっ……あつ、おおおっ……掻きっ、掻き分けられてますのっ、めりめりっ

て、オマ○コっ……ん、んんっ喉までっ突き抜けてしまいそうですわっああっ……！」
にゅぷっつ……ぬぢゅううっつ……。

ずじゅるるるっつ……じゅぶぶぶっつ……。

未知の快楽に叫び、悶え乱れながらも、二人の少女達の結合運動はゆっくりと速度を上
げていった。その様子を固唾を呑んで見守る真耶に、ゴズナが邪悪な声をかける。

「くっくっくっ……娘の次は貴様だぞ、母親よ。どうだ、楽しみか？」

「……」

と、羞恥に目を伏せた母に、その娘と交わっている最中の淫魔姫が嬌声で呼びかけた。

「はあっ……はっ、ああっ、ああんっつ……次だなどと言わず、いま、お母様も来て下さ
いなっ……っつ……ほら、メーアのお尻……ちゃんと準備できていますのよ……んんっ、

あはっ、はっ……マイも、一緒のほうがいいでしょう？」

騎乗しながら白いお尻を突き上げ、小刻みに揺らして誘う。目一杯開いて、蜜まみれの
デイルドを呑み込んでいる薄いピンク色の肉唇。その上の、やや濃い色のすぼまりは、汗
と体液に濡れててらてらと光り、餌をねだるように開閉して、とても排泄器官とは思えぬ
淫らさだった。

「え……ええ!? お尻……!？」

非常識な誘惑に、母親退魔士は困惑しつつも唾を呑む。

「自分から二本挿しだど!? 呆れたわ。ここまで下劣とはな……」

「……どうせ墮ちるなら、全力で墮ちるのが淫魔姫たる私の……プライドですわ。んあああつっ……さ、さあいらして、お母様……んんっ、おおっ、メーアのお尻っ、その太い樹で……食べてっ……」

「で、でも……だ、大丈夫なの?」

戸惑う真耶の耳に、下敷きになっている娘のあられもない声が飛び込んできた。

「ああっ、あああつっいいつつつメーアっ、メーアの中つつ凄いい気持ちいいのおつつ……!! はっ、はあっ……お、お母様っ……私っ……私、気持ちよすぎでっ、もうつつ……」

その声に、彼女の中にも抑えがたい欲望が膨れ上がった。あんなふうに、下腹部ですぎずきと疼いているこの衝動を解放したい。狂おしいほど甘く切ない体液を振りまいている、目の前の少女を、誘われるがまま貪りたい。

「わ……分かったわ……貴方がそう言うなら……」

真耶は欲望を辛うじて押さえ込め、二人におずおずと近づいた。そして勝手が良く分からないながら、差し出された美臀にロデオマシンのごとく跨がる。目の前には、破れた制服から覗く白く芳しい肌。揺れる黒髪。そして我が娘の、見たことのない歓喜の表情。

緊張と興奮に震える手を屹立する異物に添えると、自分を抱く時の夫の行動を思い出しながら、淫魔姫のもう一つの性器に狙いを定める。

「潤滑は済んでるみたいね……じゃあ……」

妖姫も腰の動きを緩め、挿入しやすいよう臀裂をやや上向ける姿勢をとった。

「はっ、ああっつ……そのまま、いらしてえ……」

腰を落として先端を宛てがってから、母親退魔士は僅かに逡巡する。

（魔物とはいえ、同じ女にこんな……ああ、どうしよう私……凄く興奮してきた。こんな……犯すなんて……犯す……なんて……。いいえ、躊躇っついても仕方ないわ。これは私達が、真衣が助かるために必要なのだから……さあ……）

そう自分に言い聞かせると、彼女は腰に力を込めて、震える疑似ペニスを眼下の魔腔に一気に押し込んだ。

ずぬぐううううつ……!!

やや濃いピンク色の括約筋が広がると、ゴムの輪をくぐるような弾力的な抵抗感でもって龟头を受け入れていく。カリの張り出しで一旦引つかかるものの、すぐに軽い衝撃とともに乗り越えた。

「んくつ……おとおおつ、す、吸い込まれるつ……何なのこれつ、お、お尻なのにつ……中がぐねぐね動いてつ、ひっああつ、舐めるつ、舐めるみたいにつ……幹をつ締めつけてつ……こんなつ……信じられないつ」

サラシから溢れんばかりの巨乳と、脂の乗った腰を震わせて叫んだ。繋がったサキュバ

「スの魔肉から、溶けた鉛のような灼熱の愉悦が流れ込み、下腹部の奥で渦巻いて神経を灼き焦がしていく。それは、相応の性経験を積んでいる熟女にとっても、未知の、堪え難い快楽だった。」

一方、さすがの淫魔姫も吸収器官の二本挿しは限界寸前だった。前後両方の性愛器官を限界一杯にまで押し広げられ、圧迫された上に、魔力を搾られていく虐悦に、白い喉を反り返らせ、髪を振り乱して悲鳴を上げる。

「あはあああああああつっつ……んあああつっ入ってっ、入ってきましたわっ……!! おおおっ、マイと、お母様のっ生命の樹っ……メーアの中でっ、ぶつかってっ……こ、これで二人に動かれたら私、私っ……ああ、ああ……っつ」

魔姫の鋭敏な媚粘膜を節くれ立った幹が引き延ばし、最奥部の子宮口とS字結腸を鉄槌のような頭部がこじ開けようとしている。薄い肉壁越しに二本の堅牢な勃起がぶつかり合うと、彼女の背骨の中を火花散る狂悦が駆け上っていく。そして。

「ブワワ……バサアツツ……」

まるで快楽のあまり正体を隠し通せなくなったとでも言うかのように、メーアの背中、服の残骸の裂け目から黒い翼が広がりながら出現した。僅かに藍色がかかった黒髪を掻き分けるようにして、一對の湾曲した角が形成される。

「メ、メーア、アンタ……っあああつでもっ、私っあああつ……駄目っ、何も考えられ

ないっつ……!! 擦れてっ…お母様が入ってきてっ…ごりごり来てっ、メーアのっ、ああっ……身体越しにつ……んあああああっつ……!!」

眼下の真衣にとつて、それは敵の一つとして教え込まれた姿であった。しかし暖かく芳しい快感に深々と呑み込まれた上、母親の硬く大きな怒張に鋭敏な裏筋を強く擦られている今、戦意など欠片ほども浮かばない。ただ本性を現した妖姫の腕にしがみつき、悲鳴を上げながら下半身をがくがくと震わせるばかり。

薄暗い不気味な空間で、三つの女体が繋がり合い、身悶え、呻いている。そしてこの薄闇の主、魔王ゴズナは、奇妙なそのオブリジェを満足げに眺めた。

「はははっ、これは良い眺めだ……さしもの淫魔もこの状態では啼くことしか出来ぬか……くく、無様なものだな。このまま非力な人間に力を吸い尽くされてしまうがいい。さあ……子ども、動け」

ピシヤッ!

「っひうっ……!」

魔王の腕が伸び、三人の一番上の真耶の尻を叩いた。すると、それが引き金になったかのように彼女の身体が動き始める。メーアの脇腹を掴む手にぐつと力を入れると、疑似ペニスの頭部が顔を覗かせるまで大きく腰を引いて。

ぐぶぶぶ……ぬばんっ!

肉のぶつかる音とともに、勢いよく打ち込んだ。

「っあああああああっつ……お尻っ、メーアのお尻がっ、オマ○コああっつ……!!」

「ひっやあああっつ擦れるっ……!! っつお母様のがっつ擦れてるのおおっつ!!」

彼女の下で貫かれ、擦られた二人の少女が悲鳴を上げる。しかし、真耶の発情抽送は止まるどころか加速していった。

んぶっ、ぬぼっ、ぬばんっつ、っばんっ、ぬんっ、むばっ……。

「あっああっ、こ、こんなっ、腰が勝手にっつ……おとおっ駄目っこんなっ気持ちよすぎでっつ……!! ごめんなさいっつこんな乱暴っつ……でも、でもっつ……ああおおっつ、まるで吸い込まれるみたいっつ……っ止まらないっつ……!!」

鍛えられた太腿に筋肉を浮かび上がらせ、猛然と腰を使い、肉を打ち付けるようにして、娘と同じ年格好の魔少女を貫いていく。結合部から逆に流し込まれる魔悦に神経を冒されながらも犯していく。

「あああああっ犯されてるっつメーアのお尻っ……あっこんなっつあああっ、深いところまでっ……!! はらわた越しにっ、子宮っ……がつんがつんっつ、ぶつかってっつ……犯されてっつ……ああおおっつ、お尻っ……子宮っ……気持ちいいですうっ……!! マイっ、マイもっ犯してっつ、メーアのオマ○コっつ、お母様と一緒にっ……食べてえっつ……!!」

真衣も、二人につられるようにして腰を突き上げ始めた。母の偽根が引き抜かれるのに

タイミングを合わせて、魔勃起で肉襷を掻き出すようにして腰を引く。それから、可憐な薄ピンクの媚肉に向けて、粘液が飛び散るのも構わずに力一杯打ち込む。

ぐぶんっ、ぬぼっ、ごんっ、ぐぷっ……。

「うっうああああっ、こ、こんなっ……身体が勝手にっ……こんなのっ、私っ女の子なのにつっ……んあっ、男の子みたいにつ動いてっ……んああああつっ」

伝わってくる絶対的な快感に嗚咽しながらも、まるで最初からそれがついていたかのようにながむしやりに動き、貪っていく。彼女が貫き、掻き出すたびに、その上でメーアが仰け反り苦悶し、淫らな表情を見せつける。真衣はぼんやりと、それを美しいと思つた。

「ひああああああつっ、犯されてますっ……メーア、お母様に、マイに犯されてっ、力っ、霊体っ、吸い取られてますのっ……どんどんっ吸われてっ淫魔なのにつ、人間につ、おっおおっっこんなっ犯されてっ、食べられてっ凄いいっ、凄いい気持ちいいっ、初めてですうっ……あああつもう、もうメーアはっ、メーアはあつ……!!」

妖嬢も、魔造の両性具有二人に胎内を犯し抜かれる虐待に、身も世もなく惑乱する。貫かれる反動で黒髪が波打ち、両の乳房がたわみ、揺れる。背中から展開した黒翼が痙攣しながら曲がり、よじれ、のたうっ。苦悶とも恥辱ともつかぬ雫が、閉じた瞼から赤らんだ頬を伝い落ちていく。

んぷっ、ぬぼっ、ぬばんっ、っばんっ、ぬんっ、むばっ……。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>